

番歌	作者	区分	上の句	下の句	主題
序	わに 王仁	—	なにはづ 難波津に 咲くやこの花 冬ごもり	いま はる 今を春べと 咲くやこの花	
1	てんじてんのう 天智天皇	シキ アキ 四季(秋)	あき た 秋の田の かりほの庵の 苦をあらみ	わが衣手は 露にぬれつつ	のうふ しんく おも 農夫の辛苦を思いやる天皇の心
2	じとうてんのう 持統天皇	シキ ナツ 四季(夏)	はるす 春過ぎて 夏来にけらし 白妙の	ころも ちよう あま かくやま 衣ほすてふ 天の香具山	さわやかな 夏の おとずれ、時の 推移
3	かきものとのひとまる 柿本人麻呂	コイ 恋	あしびきの やまどり を 山鳥の尾の したり尾の	なが よる 長い夜を ひとりかも寝む	なが よる 長い夜をひとり寝るさびしさの嘆き
4	やまべのあかひと 山部赤人	シキ フユ 四季(冬)	たご 田子の浦に うち出でて見れば 白妙の	ふじ たかねに ゆきは 富士の高嶺に 雪は降りつつ	ふじさん しんせい うつく 富士山の神聖な美しさへの感動
5	さるまるだゆう 猿丸大夫	シキ アキ 四季(秋)	おくやま 奥山に 紅葉踏み分け 鳴く鹿の	こえき 声聞く時ぞ 秋は悲しき	く 暮れてゆく 秋山の 寂寥と哀感
6	ちゆうなごんやかもち 中納言家持	シキ フユ 四季(冬)	かささぎ わた 鶺鴒の 渡せる橋に 置く霜の	しろ み 白きを見れば 夜ぞ更けにける	きゆうちゆう ふゆ 宮中の冬の霜の夜更けの幻想的な美しさ
7	あべのなかまろ 安倍仲麿	キリヨ 羈旅	あま はら 天の原 ふりさけ見れば 春日なる	みかさ やまに 出でし月かも	いこく 異国で見る月によって催された望郷の念
8	きせんほうし 喜撰法師	ザツ 雑	わが庵は 都のたつみ しかぞ住む	せを 世をうち山と 人はいふなり	こころ 心静かに住む、宇治での隠棲
9	おのこまち 小野小町	シキ ハル 四季(春)	はな いろ 花の色は うつりにけりな いたづらに	わが身世にふる ながめせしまに	いろ 色あせた桜に寄せての、容色の衰えと憂愁の心
10	せみまる 蟬丸	ザツ 雑	これやこの 行くも帰るも 別れては	し 知るも知らぬも 逢坂の関	ひとびと 人々が逢坂では別れる、逢坂の関に寄せる感慨
11	さんぎたかわら 参議篁	キリヨ 羈旅	わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと	ひと 人には告げよ 海人の釣舟	はいる 配流の舟出の孤独感と、都の人に寄せる思慕の情
12	そうじょうへんじょう 僧正遍昭	ザツ 雑	あま 天つ風 雲の通ひ路 吹き閉ぢよ	おとめ 乙女の姿 しばしとどめむ	ごせつ 五節の舞姫の美しさに魅せられ、これを賛美する心
13	ようぜいん 陽成院	コイ 恋	つくばね 筑波嶺の 峰より落つる 男女の川	こい 恋ぞ積もりて 淵となりぬる	ひそかな 恋心が積もり深い物思いに悩んでいること
14	かわらのさだいじん 河原左大臣	コイ 恋	みちのく 陸奥の しのぶもちずり 誰ゆゑに	みだ 乱れそめにし われならなくに	あいて 相手のために乱れてしまった心の強い高ぶり
15	こうこうてんのう 光孝天皇	シキ はる 四季(春)	君がため 春の野に出でて 若菜摘む	わが衣手に 雪は降りつつ	ゆき 雪に降られながら若菜を摘む、相手へのまごころ
16	ちゆうなごんゆきひら 中納言行平	リベツ 離別	立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる	まつとし 間かば 今帰り来む	わか 別れに際して名残を惜しむ人への挨拶
17	ありわらのなりひらあそん 在原業平朝臣	シキ あき 四季(秋)	ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川	からくれなゐに 水くるとは	たつたがわ 竜田川に散り流れる紅葉の華麗な美しさ
18	ふじわらのとしゆきあそん 藤原敏行朝臣	コイ 恋	すみ 住みの江の 岸に寄る波 よるさへや	ゆめ 夢の通ひ路 人目よくらむ	ゆめ 夢においても人目を忍ぶ恋のもどかしさ
19	いせ 伊勢	コイ 恋	なにはがた 難波湍 短き蘆の ふしの間も	あわ 逢はでこの世を 過ぐしてよとや	おとず 訪れて来ない男をなじる恨みと嘆きの心
20	もとよしんのう 元良親王	コイ 恋	わびぬれば 今とは同じ 難波なる	みをつくしても 逢はむとぞ思ふ	み 身を滅ぼしてでも会いたいという激しい恋心
21	そせいほうし 素性法師	コイ 恋	今来むと 言ひばかりに 長月の	ありあけ 有明の月を 待ち出でつるかな	やくそく 約束しながら来なかった男への恨み言
22	ふんやのやすひで 文屋康秀	シキ あき 四季(秋)	吹くからに 秋の草木の しをるれば	むべ 山風を 嵐と言ふらむ	あき 秋の草木をしおれさせる山風の荒々しさ
23	おおえのちさと 大江千里	シキ あき 四季(秋)	月見れば 千々に物こそ 悲しけれ	わが 我が身ひとつの 秋にはあらねど	あき 秋の夜の月をながめて、物思いにふける孤独の悲哀
24	かんげ 菅家	キリヨ 羈旅	このたびは 幣も取りあへず 手向山	もみじ 紅葉の錦 神のまにまに	てむこうやま 手向山の紅葉を幣としてささげること
25	さんじょうのうだいじん 三条右大臣	コイ 恋	名にし負はば 逢坂山の さねかつら	ひと 人に知られで 来るよしもがな	だれ 誰にも知られないで逢いたいという切実な思慕の情
26	ていしんこう 貞信公	ザツ 雑	小倉山 峰のもみぢ葉 心あらば	いま 今ひとたびの みゆき待たなむ	こうよう 紅葉の美しさへの賛美と、散らずにいてほしい願望
27	ちゆうなごんかねすけ 中納言兼輔	コイ 恋	みかの原 わきて流るる 泉川	いつ いつ見きとてか 恋しかるらむ	まだ まだ見ぬ女性に対する強い恋心の不思議さ
28	みなもとのおかきあそん 源宗子朝臣	シキ ふゆ 四季(冬)	山里は 冬ぞ寂しさ まさりける	ひと 人目も草も 枯れぬと思へば	ひと 人も訪れず草も枯れてしまう冬の山里の寂寥感
29	おほこうちのみつね 凡河内躬恒	シキ あき 四季(秋)	心あてに 折らばや折らむ 初霜の	お 置きまどはせる 白菊の花	はつしも 初霜にまぎれるばかりの白菊の清楚な美しさ
30	みぶのただみね 王生忠岑	コイ 恋	ありあけ 有明の つれなく見えし 別れより	あかつき 暁ばかり 憂きものはなし	よそよそしい 態度を見せた女性への恨み言
31	さかのうえのこれり 坂上是のり	シキ ふゆ 四季(冬)	朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに	よしの 吉野のさとに 降れる白雪	ありあけ 有明の月のように明るく降り積もる吉野の雪の清さ
32	はるみちのつらき 春道列樹	シキ あき 四季(秋)	山川に 風のかけたる しがらみは	なが 流れもあへぬ 紅葉なりけり	やまかわ 山川にしがらみのように散りたまつた紅葉の美しさ
33	きのものり 紀友則	シキ はる 四季(春)	久方の 光のどけき 春の日に	しず 静すこなく 花の散らむ	はる 春ののどかな陽光の中に散る桜の美しさを惜しむ心
34	ふじわらのおきかぜ 藤原興風	ザツ 雑	誰をかも 知る人にせむ 高砂の	まつ 松も昔の 友ならなくに	むかし 昔の友人がみな死んでしまった、孤独な老いの嘆き
35	きのつらゆき 紀貫之	シキ はる 四季(春)	人はいさ 心も知らず ふるさとは	はな 花ぞ昔の 香に匂ひける	かわらぬ 変わらぬ梅の美しさと、人の心のうつろいやすさ
36	きよはらのふかやぶ 清原深養父	シキ なつ 四季(夏)	夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを	くも 雲のいづこに 月宿らむ	くも 雲の彼方に姿を隠している、夏の夜の月を惜しむ心
37	ふんやのあさやす 文屋朝康	シキ あき 四季(秋)	白露に 風の吹きしく 秋の野は	つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける	あき 秋の野の風に散り乱れる白露の美しさ
38	うこん 右近	コイ 恋	忘らるる 身をは思はず 誓ひてし	ひと 人の命の 惜しくもあるかな	あい 愛を誓った相手が神罰で滅びゆくことを惜しむ恋心
39	さんぎひとし 参議等	コイ 恋	浅茅生の 小野の篠原 忍ぶれど	あまりてなどか 人の恋しき	おさえられない 恋心の切なさの告白
40	たいらのかねもり 平兼盛	コイ 恋	忍れど 色に出でにけり わが恋は	もの 物や思ふと 人の問ふまで	かく 隠せば隠すほど表情に表れてしまう悩ましい恋心
41	みぶのただみ 王生忠見	コイ 恋	恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり	ひと 人知れずこそ 思ひ初めしか	ひそかな 恋が人の噂になってしまったことへの当惑
42	きよはらのもとすけ 清原元輔	コイ 恋	契りきな かたみに袖を しばりつつ	すえ 末の松山 波越さじとは	やくそく 約束を守らずに心変わりした女性の不実をなじる心
43	ごんちゆうなごんあつただ 権中納言敦忠	コイ 恋	逢ひ見ての 後の心に くらぶれば	むかし 昔は物を 思はざりけり	ちぎ 契りを結んでからの深い恋心の切なさ
44	ちゆうなごんあさた 中納言朝忠	コイ 恋	逢ふことの 絶えてしなくは なかなか	ひと 人をも身をも 恨みざらまし	逢 逢ってかえってつれなくなった相手を恨む苦しみ
45	けんたくこう 謙徳公	コイ 恋	あはれとも いふべき人は 思ほえて	み 身のいたづらに なりぬべきかな	おんな 女に捨てられた男の、孤独な弱い心
46	そねのよしただ 曾禰好忠	コイ 恋	由良のとを 渡る舟人 ちを絶え	ゆくえ 行方も知らぬ 恋の道かな	しょうらい 将来の予測のつかない恋の行く末の不安
47	えぎょうほうし 恵慶法師	シキ あき 四季(秋)	八重むぐら 茂れる宿の 寂しきに	ひと 人こそ見えね 秋は来にけり	おとず 訪れるものは秋だけという荒れた住まいのわびしさ
48	みなもとのおしげゆき 源重之	コイ 恋	風をいたみ 岩うつ波の おのれのみ	く くだけて物を 思ふころかな	つれない つれない女性のために思い悩む片思いのやるせなさ
49	おおなかとみのよしのぶあそん 大中臣能宣朝臣	コイ 恋	御垣守 衛士のたく火の 夜は燃え	ひる 昼は消えつつ 物をこそ思へ	よる 夜も昼も思い悩む恋心の苦しみ
50	ふじわらのよしただ 藤原義孝	コイ 恋	君がため 惜しからざりし 命さへ	なが 長くもがなと 思ひけるかな	いのち 命まで惜しくないと思った恋の永続を願う気持ち

番歌	作者	区分	上の句	下の句	主題
51	ふじわらのさわかたあそん 藤原実方朝臣	こい 恋	かくとだに えやは伊吹の さしも草	さしも知らじな 燃ゆる思ひを	むねにあまる切ない恋心を相手に訴えようとする心
52	ふじわらのみちのぶあそん 藤原道信朝臣	こい 恋	明けぬれば 暮るものとは 知りながら	なほ恨めしき 朝ぼらけかな	また逢えると知りながらも別れて帰る夜明けのつらさ
53	うだいしようみちつなのはは 右大将道綱母	こい 恋	なげ嘆きつつ ひとり寝る夜の 明る間は	いかに久しき ものとかは知る	ひとり寝の長くつらい夜の嘆きを相手に訴える心
54	ぎどうさんしのはは 儀同三司母	こい 恋	忘れじの 行く末までは かたければ	今日を限りの 命ともがな	幸福の絶頂において死んでしまいたいという女心
55	だいなごんきんとう 大納言公任	ざつ 雑	たきおと 絶えて久しく なりぬれど	なこそ流れて なほ聞こえけれ	みずか 濁れて久しい瀧の今もなお伝わる名声への賛美
56	いずみしきぶ 和泉式部	こい 恋	あらざらむ この世のほかの 思ひ出に	いま今ひとたびの 逢ふこともがな	来世への思い出にもう一度逢いたいという恋心
57	むらさきしきぶ 紫式部	ざつ 雑	めぐり逢ひて 見しやそれとも 分かぬ間に	くもがく 雲隠れにし 夜半の月かな	あわたたしく帰っていった幼友たちへの名残惜しさ
58	だいにのさんみ 大式三位	こい 恋	ありまやま 猪名の笹原 風吹けば	いでそよ人を 忘れやはする	つめたい男に対して自分の変わらぬ気持ちを訴える心
59	あかぞめえもん 赤染衛門	こい 恋	やすらはで 寝なましものを 小夜更けて	かたぶくまでの 月を見しかな	来ると約束して来なかった男への恨み言
60	こしきぶのないし 小式部内侍	ざつ 雑	おほえやま いく野の道の 遠ければ	まだふみも見ず 天の橋立	はは 母からの便りは受け取っていないという趣旨の伝達
61	いせのたいふ 伊勢大輔	しき はる 四季(春)	いにしへの 奈良の都の 八重桜	きょうこのえ 今九重に 匂ひぬるかな	きみやさいしやうきやう や えざら 旧都平城京の八重桜が、平安京の宮中に咲く美しさ
62	せいしょうなごん 清少納言	ざつ 雑	夜をこめて 鳥の空音は はかるとも	よに逢坂の 関は許さじ	よるふか 夜深いうちに帰った男に対し、やり返す心
63	さきょうのたいふみちまさ 左京大夫道雅	こい 恋	今はただ 思ひ絶えなむ とばかりを	ひと 人づてならで 言ふよしもがな	あきらめると一言だけでも直接告げたい切なる思い
64	ごんちゆうなごんさだより 権中納言定頼	しき ふゆ 四季(冬)	朝ぼらけ 宇治の川霧 たえだえに	あらはれわたる 瀬々の網代木	きり たま 霧の絶え間に網代木が見える宇治川のすがすがしさ
65	さかみ 相模	こい 恋	恨みわび 干さぬ袖だに あるものを	こひ 恋に朽ちなむ 名こそ惜しけれ	こい 恋の浮き名に朽ちてしまいそうな自分を惜しむ心
66	さきのだいそうじやうぎやうそん 前大僧正行尊	ざつ 雑	もろともに あはれと思へ 山桜	はな 花よりほかに 知る人もなし	しゆぎやう 修行のために入った深山での山桜に呼びかける孤独感
67	さうらのないし 周防内侍	ざつ 雑	春の夜の 夢ばかりなる 手枕に	かひなく立たむ 名こそ惜しけれ	たわむれに契っては浮き名が立つと、断る気持ち
68	さんじやういん 三条院	ざつ 雑	心にも あらで憂き世に 長らへば	こい 恋しかるべき 夜半の月かな	ふくう 不遇な現実も恋しく思えるだろうという絶望的嘆き
69	のういんほうし 能因法師	しき あき 四季(秋)	嵐 吹く 三室の山の もみぢ葉は	たつた 竜田の川の 錦なりけり	たつたがわ 竜田川に浮かぶもみぢ葉の錦織のような美しさ
70	りやうぜんほうし 良暹法師	しき あき 四季(秋)	寂しさに 宿をたち出でて ながむれば	いづくも同じ 秋の夕暮れ	ものみなが秋の夕暮れの寂寥をたたえている感慨
71	だいなごんつねのぶ 大納言経信	しき あき 四季(秋)	夕されば 門田の稲葉 おとづれて	あし 蘆のまろ屋に 秋風ぞ吹く	ゆうがた 夕方いなかやいなだわた 秋風が吹いて来る秋風の風情
72	ゆうしなしいんのうけのき 祐子内親王家紀伊	こい 恋	音にきく 高師の浜の あだ波は	かけじや袖の 濡れもこそすれ	うわき 浮気で評判の男性に言い寄られ、それを拒む気持ち
73	ごんちゆうなごんまさふさ 権中納言匡房	しき はる 四季(春)	高砂の 尾の上の桜 咲きにけり	外山 外山の霞 立たずもあらなむ	はるかな 山みねに 桜への愛着
74	みなもととのしよりあそん 源俊頼朝臣	こい 恋	憂かりける 人を初瀬の 山おろしよ	はげ 激しかれとは 祈らぬものを	つれない人をなびかせようと祈ったが、叶わぬ嘆き
75	ふじわらのもととし 藤原基俊	ざつ 雑	契りおきし させもが露を 命にて	あはれ今年の 秋もいぬめり	ねが 願っていた子供の栄達の約束が果たされぬ悲嘆
76	ほっしやうじにじゆうどうきさきのかんばくだいじよ 法性寺入道前関白太政大臣	ざつ 雑	わたの原 漕ぎ出でて見れば 久方の	くもい 雲居にまがふ 沖つ白波	はくわん 白雲と沖の白波とがとけあって見える大海原の眺め
77	すどくいん 崇徳院	こい 恋	瀬を早み 岩にせかるる 滝川の	われても末に 逢はむとぞ思ふ	なか 仲をさかれても将来は一緒にいようという強い恋心
78	みなもとのかねまさ 源兼昌	しき ふゆ 四季(冬)	淡路島 通ふ千鳥の 鳴く声に	いくよね 幾夜寝覚めぬ 須磨の関守	すま 須磨の千鳥の声によってもよおされた旅の哀感
79	さきょうのたいふあきすけ 左京大夫顕輔	しき あき 四季(秋)	秋風に たなびく雲の 絶え間より	もれい 漏れ出づる月の 影のさやけさ	くも 雲の間からもれて来る秋の月の光の清らかな美しさ
80	たいけもんいんのほりかわ 待賢門院堀河	こい 恋	長からむ 心も知らず 黒髪の	みだ 乱れて今朝は 物をこそ思へ	ちぎ 契りを結んだ翌朝の、心変わり案じる恋の物思い
81	ごとくだいじのさだいじん 後徳大寺左大臣	しき なつ 四季(夏)	ほととぎす 鳴きつる方を ながむれば	ただ有明の 月ぞ残れる	ほととぎすの初音の方には月が浮かんでいたこと
82	どういんほうし 道因法師	こい 恋	思ひわび さても命は あるものを	う 憂きに堪へぬは 涙なりけり	つれない人を恋慕うことのつらさ、かなしさ
83	こうたいごうぐうのたいふしゆんせ 皇太后宮大夫俊成	ざつ 雑	世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る	やま 山の奥にも 鹿ぞ鳴くなる	よ 夜の苦しみ、つらさをはらうすべのない深いさびしさ
84	ふじわらのきよすけあそん 藤原清輔朝臣	ざつ 雑	長らへば またこの頃や しのばれむ	うら 憂しと見し世ぞ 今は恋しき	つらく 苦しい現実にくら 沈みがちな心境
85	しゆんえほうし 俊恵法師	こい 恋	夜もすがら 物思ふころは 明けやらで	ねや 闇のひまさへ つれなかりけり	おと 訪れて来ない男のつれなさを恨む心
86	さいぎやうほうし 西行法師	こい 恋	なげ嘆けとて 月やは物を 思はする	かこち顔なる わが涙かな	こい 恋の物思いで、月を見ても涙がこぼれ落ちる心境
87	じやくれんほうし 寂蓮法師	しき あき 四季(秋)	村雨の 露もまだ干ぬ 槇の葉に	きりた 霧立ちのぼる 秋の夕暮れ	きりた 霧が立ちのぼる秋の夕暮れの、静かで心寂しい情景
88	こうかもいんのべつとう 皇嘉門院別当	こい 恋	難波江の 蘆のかりねの ひとよゆえ	み 身を尽くしてや 恋ひわたるべき	たび 旅寝の一夜の契りゆえの、途な女の恋心のあわれさ
89	しよくしなしいんの 式子内親王	こい 恋	玉の緒よ 絶えなば絶えね ながらへば	しの 忍ぶることの 弱りもぞする	ひと 人目を忍び心に秘める、忍ぶ恋の激しい心情
90	いんぶもんいんのたいふ 殷富門院大輔	こい 恋	み 見せばやな 雄島の海人の 袖だにも	ぬ 濡れにぞ濡れし 色は変はらず	あいて 相手のつれなさを嘆き、つらさを訴える恋の心情
91	ごきやうごくせつしやうきさきのだいじよ 後京極摂政前太政大臣	しき あき 四季(秋)	きりぎりす 鳴くや霜夜の さむしりに	ころもかたし 衣片敷き ひとりかも寝む	さむ 寒い霜夜のひとり寝のわびしさ
92	にじやういんのさぬき 二条院讃岐	こい 恋	わが袖は 潮干に見えぬ 沖の石の	ひと 人こそ知らね 乾く間もなし	ひと 人知れぬ片恋の嘆き、かなしみ
93	かまくらのうだいじん 鎌倉右大臣	きりよ 羈旅	世の中は 常にもがもな 渚漕ぐ	あま 海人の小舟の 綱手かなしも	りやうし 漁師のさまを見て、世の無常を嘆く哀感
94	さんぎまさつね 参議雅経	しき あき 四季(秋)	み吉野の 山の秋風 小夜更けて	ふるさと 寒く 衣打つなり	きぬたの 音か身にしみる、吉野山の秋の夜の寂しさ
95	さきのだいそうじやうじえん 前大僧正慈円	ざつ 雑	おほけなく 憂き世の民に おほふかな	わが立つ 世に 墨染めの袖	よ 世の人々のために仏の加護を祈ろうとする決意
96	にじゆうどうきさきのだいじよ 入道前太政大臣	ざつ 雑	花さそふ 風の庭の 雪ならで	ふりゆくものは わが身なりけり	さくら 桜の落花に寄せて述べる自身の老いの嘆き
97	ごんちゆうなごんさだえ 権中納言定家	こい 恋	来ぬ人を まつ帆の浦の 夕なぎに	焼くや 湯の身もこがれつつ	まち 待てども来ぬ人待つ女心のもどかしさ、嘆き
98	じゆにいいたか 従二位家隆	しき なつ 四季(夏)	風そよぐ ならの小川の 夕暮れは	み 御禊ぞ夏の しるしなりける	あき 秋の気配が感じられる、夏の終わりの夕暮れの情感
99	ごとばいん 後鳥羽院	ざつ 雑	人もをし 人も恨めし あぢきなく	よ 世を思ふゆゑに 物思ふ身は	あいぞう 愛憎が交錯し、思い悩みつつ世に生きる身の嘆き
100	しゆんとくいん 順徳院	ざつ 雑	百敷や 古き軒端の しのぶにも	なほ 余りある 昔なりけり	さか 栄えていた昔の御代を懐かしみ朝廷の衰微を嘆く心